法学部

「やる気応援奨学金」リポート

Vol. 96

留学で生のドイツ語に触れる 将来はジャーナリスト目指す

法学部政治学科三年　川島　希望（私立敦賀気比高校）

今回、私は「やる気応援奨学金」を受給して三月三日から四月五日までドイツのフライブルクという都市で語学研修に参加すると同時に、環境系ＮＧＯへのインタビューを行い、反原発、ドイツの環境政策について生の声を聞きました。

留学の動機

私がドイツ留学を考えるに至った一番のきっかけは、大学一年次に大学の短期留学プログラムを利用し、アメリカのカールトン大学に留学したことでした。初の海外でしたが、英語は中学、高校と六年も学んでいたので渡航前は英語がしゃべれるという自信がどこかにありました。しかし実際は全くしゃべることが出来ず、悔しい思いをしたのを今でも覚えています。その時語学力をつけるには、現地に行くなり、話す練習をするのが一番であると気付きました。そこで第二外国語として学んでいて、もともと興味のあったドイツ語もただ机上での学習で終わらせるのではなく、実際に生の言語に触れしゃべれるようになりたいと思うようになり、より一層ドイツ語学習に力を入れ始めました。

そんな中、私はドイツからの交換留学生と知り合う機会がありました。一年以上学んだドイツ語を試すチャンスでしたが、あんなにテスト前に真剣に覚えた単語やフレーズが一つも出てきませんでした。この体験も、ドイツに行きたいと思う気持ちを強くさせました。そして自分がドイツ語を使って何がしたいのか、そして今までの大学生活を通して何を学んできて、何に興味があるのか、自分の大学生活の軸となるものを巡って、自分と向き合いながら、考えてみました。そんな中自分の頭に浮かんだのはヘッセ先生のゼミで学んできた環境政治学、そして福島第一原発事故と地元の福井県敦賀市でした。ヘッセ先生のゼミでは、英語で環境政策やエネルギー政策について学んでいましたが、そこでのリサーチを通して、ドイツが二〇二二年までに原子力発電所をゼロにするという大きな決断をしたことを知りました。しかも、その一つのきっかけは福島第一原子力発電所の事故だったというのです。事故のあった日本では原発再稼働に向けて動いている中、はるか遠くのドイツで反原発に向かっている、この大きな差に興味を抱きました。そして私は原発銀座と呼ばれる福井県敦賀市の出身で、原発の近くで育ってきたこと、身近な存在として更には街の活力として原発を見てきたことも大きな動機となりました。

このような経緯から、「環境都市」として知られ、初めて原発反対運動が行われ原発建設を阻止した街でも有名なフライブルクを訪れることを決めました。ドイツでは、脱原発運動を行うAnti-Atom

Freiburgというｎｇｏを訪問しインタビューを行いました。

語学学校

私は、フランスとスイスと国境を接するバーデン＝ヴュルテンベルク州にあるフライブルク大学のスプリングコースに参加しました。このコースを選んだ理由は、大学の施設を利用出来ること、そしてドイツ人の学生と知り合う機会があること、プログラムに希望者が参加出来る環境ゼミがあることなどが挙げられます。

事前テストの結果、下から二番目の初級クラスに振り分けられましたが、それでも付いていくのに必死でした。単語や文法知識には自信がありましたが、実際には聞き取ることですら難しかったです。また、間違っていても良いからとにかく発言するように努力しました。

午前中の授業は文法が中心で、日本でやっていた内容だったので理解出来ましたが、先生の説明しているドイツ語が理解出来ず、当初はもどかしさばかりを抱きました。

午後の授業はオプションで義務ではなかったのですが、ドイツ語をもっとやりたいと思ったのでもちろん参加しました。そこでは話すことを中心とした授業でした。課外授業で美術館に行き、自分の興味を引いたものを次の日の授業でみんなの前でプレゼンしたり、環境問題を扱った記事が与えられ、それを瞬時に読み、賛成派と反対派に分かれてディスカッションをしたり、最後の授業では、あらかじめ決められていたグループで今までリサーチしてきたことを二〇分間のプレゼンにまとめるなど充実していました。私のグループはガーナ人とブラジル人で、彼らが英語をあまり話せなかったのですべてドイツ語でやり取りしたことは、良い経験になりました。私たちは、黒い森（シュバルツバルト）をテーマにフライブルクの環境政策について発表しました。ドイツ語面だけではなく、環境政策について、さまざまな国の文化、課外活動、プレゼンなどさまざまな経験と出会いのある語学コースでした。

クラスメートと共に

ｎｇｏを訪問

先ほど留学の動機の方で述べたように、私がAnti-Atom Freiburgという反原発を掲げ活動しているｎｇｏを訪問先に決めたのは、福島第一原発事故と郷里の福井県敦賀市の原発事情があったためです。私の生まれ育った福井県敦賀市では、市の就労者の七割が、関西電力など、原子力発電関連の企業に従事しています。つまり敦賀市は原発なしには立ち行かない街と言っても良いでしょう。現在テレビのニュースなどでよく敦賀原発の稼働問題について耳にすることも多いでしょう。それほど原発が身近に感じられる街であり、同時に原発は街を潤わせる源でもあるのです。

そんな中起こった福島第一原発事故。原発に対する人々の意識は一転。多くの人々が原発の再稼働に反対しています。日本は大きな

エネルギー問題を抱え、新たなエネルギー源を模索しているのが現状です。

一方のはるか遠くのドイツで二〇二二年までにすべての原発を停止するという政策を打ち出しました。その大きな日本とドイツの違いに興味を抱き、ドイツでしかも環境先進都市フライブルクで活動するNGOを探しました。そして出会ったのが、Anti-Atom Freiburgでした。

Anti-Atom Freiburgは二〇一〇年からの活動と比較的新しいNGOで、メンバーは七人。その中に日本人の女性がいました。彼らの活動は、原発を廃止することと、子供や未来の世代を危険から守ることを目的としているとのことです。私は日本人女性に招待され、日本デーのイベントのスタッフとして参加しました。日本デーのイベントは、三・一一の災害の後、あの悲劇を忘れないようにと毎年催されているもので、フライブルク在住の日本人が集まって日本食を振る舞ったり、日本文化を紹介したりしながら、原子力問題や環境問題について考える場を提供しています。私はそこで長年やってきた書道を生かして、ドイツ人のリクエストに合わせて名前を書いてあげたりしました。そこで使ったドイツ語はかなりの実践練習となりました。

Anti-Atom Freiburg の皆さん

そしてAnti-Atom Freiburgへのインタビューの日を迎えました。ドイツ語で質問を用意していましたが、返ってきた答えを理解することが出来ず、英語に切り替えました。インタビューを通しての一番の収穫はネットや本などでは分からなかった「生の声」が聞けたことです。私が現在の反原発運動の問題点を伺ったところ、答えはドイツ人の反原発、脱原発に対する意識が薄れているということでした。なぜこの問題を問題視するかというと、スペインやスイスでの前例があるからだそうです。スペインやスイスでは同じように脱原発の政策が打ち出されたにもかかわらず、成功しなかった。この前例があるからこそそれを想定して訴え続けなければならないのだとおっしゃっていました。

このインタビューを聞き改めて日本の現状について考えました。事故から二年以上がたった日本では、最近では汚染水処理の問題、子供たちの甲状腺がんの問題、再稼働に向けた国の取り組み、インドなどへの原発技術の輸出など今でも多くの問題が残っており、原発ゼロに向かうドイツとは対照的な状況となっています。それと同時に国民の意識を考えてみると、メディアなどもあまり福島のことを報道しなくなったこともあり、再稼働に反対する意思が薄れているのではないでしょうか。現状をメディアが伝え続けることは重要であり、メディアの影響力も改めて感じました。インタビューを通し、私は、国の政策を変えるためには国民の訴える力が必要であり、とても有効であると感じました。日本では、SNSなどを通して意

見や国に対する不満を言う人もいますが、実際に行動に移す人が本当に少ないように感じます。インタビューにおいて新たな発見も多くあり、改めて自らの足で訪れ、目で耳で体験することの大切さそして面白さを知りました。

帰国後の転機

ドイツでドイツ語をうまく話せなかった悔しさと、もっと話せるようになりたいという意欲から、更なる「やる気」に動かされて、現在総合政策学部や文学部のドイツ語の授業を履修しています。プレゼンなども多く私の身の丈にはいまだ合っていないように感じますが、周りのしゃべれる学生から刺激を受けながらドイツ語の学習を続けています。まさに「やる気応援奨学金」の「魂」であるやる気をもらった気がします。

現在私は三年生で就活を間近に控えていますが、この短期留学で一年間の交換留学を考えるようになりました。学生のうちにしか出来ないことだと思いますし、何より中途半端なままで終わらせたくないのです。やるならとことん。もちろん就活など不安もありますが、もっと勉強したいという気持ちが強くあります。現在酒井先生・高橋先生のゼミでグローバル世界の中での途上国の政・経済・現状を英語で学んでいます。学べば学ぶほど疑問が出てきます。それをドイツ語あるいは英語でもう一年間勉強したい。このまま普通に就活を始めて就職してそれで果たして自分がやりたいことが出来るのか。そんな保証はありません。ならば自分の今やりたいことに全力で打ち込みたい、そう考えています。

友人たちに開いてもらったフェアウェルパーティーで

将来

私は将来、ジャーナリストを目指しています。自分が焦点を当てたいのは、貧困に苦しむ子供たち。児童労働や教育格差、伝染病などに苦しむ人々が世界中にあふれています。児童労働に限って言えば国がその事実を隠している場合も多いのです。そんな権力に立ち向かえるのがマスメディアではないかと思います。ドイツのメディアがインドのじゅうたん産業の児童労働の現状を世界に報道して、それがラグマーク運動に結び付いたという例もあるように、メディアには光の届かない人々に光を届ける力があると思います。私はメディアを通してその懸け橋になりたい、それが私の夢です。ドイツ留学を通して自分で訪れて確かめることの楽しさ、興味深さを知りますますその夢に対するモチベーションが上がりました。さまざまな経験を積んで自分の視野を広げ自分というものと向き合っていきたいと思います。

最後に、私の相談に親身になって乗ってくださった真田先生、小林先生、平山先生にこの場をお借りして御礼申し上げます。本当にありがとうございました。「やる気応援奨学金」に出会えたことで私の将来への方向性も変わりました。奨学金の趣旨を捉えることが出来たのかも知れません。

法学部の皆さん、迷ったらぜひ挑戦してみてください。新たな自分が見付かるチャンスかも知れませんよ！